

故園の菜

佐藤一英 著



1

青騎士齋畫

Al miaj karaĵfratinoj.
de J. Sato,

Mi dankegas vin por via
laboro el turo.

Mi amas poemon tiel,
kiel vivo.

詩集

故園の萊

佐藤一英著

青騎士叢書
(1)



詩集 故園の萊 目次

空	居——福士幸次郎に獻する——	一
春立つ前に	四
夕の悲歌	六
落葉樹	九
睡	眠.....	一〇
別離	一二
怠惰のとき	一四

静物に讃す——藤井外喜雄に——	一七
夜の時	二〇
秋日	二二
雪の後	二五
夜の雨	二六
思ひ出の小徑	二八
過勞	三〇
夏の夕	三二
夜の街	三五
無題	三八

新 生	四〇
老いた空——西條八十に——	四二
冬の午後	四四
梅 雨 期	四六
醉(イントキシンケイション)	四八
夜の躑躅	五〇
最終の夢	五二

空
居

——福士幸次郎に獻する
君が尾張善福寺にありし日の紀念に——

朝の心の緑みどりのなかに浮あび上ある純白の思念のやうに
その寺院は、いつも高層な屋根を碧空あをぞらのなかに磨こいてゐた
けれど私の靈たましいは、いつも影かげを着きることを學まび
額ひたいの皺しわの感觸かんじを海うみのゆるやかな波なみにも、まして欣よろこんだため
冬ふゆばかりの二十年を、その最下層さいげらうの一室いつしつに暮くした！

あ、冷笑の黒い瞳めの球たま(サツクのバネの緩ゆるんだ黒水晶の—)
 それは一つの、たつた一つの、剥むげた木像をたのしみ
 後ろに伸びた土色の菌の耳は(いつからか干ひ乾からびてゐる)
 枯草の髪かみのすきから、半ば傾かたむき、徒勞むなな啓示けいしを待つてゐた
 あゝ 冬ばかりの二十年……………

その間、私の靈には寺院の屋根が昏昏と眠りに落ちてゐる
 船のやうに

眠りつつ進む船の底のやうに、海を割つて進んでゐるやう

に思へた

倒まがさになつた部屋の、夢のなかの暗い思慕……………

(記憶せよ、唯一つ、黄金こがねの心象イメジ!)ある夕ゆふべ、私は眼覺めざめた
 常緑樹とこよぎが黄金こがねの大氣たいきに黄金こがねの鈴すずを吊つるした時、(船は止つた!)

春立つ前に

窓をあけるにまだ早い春立つ前の日々を

髪の毛の下に二つの肩は重さが加はるばかりだ！……

けれど夕暮れただひととき一時を忘れるな

一日中さまよひ暮した

頁の文字の動かぬ樹々のものうさに

あの一時を日脚のわづかに立ちどまる障子戸を見よ

(それは春の大なる書物の頁！)

おどろくばかり明るい世界に點々と蓄をつけた枝々の影……

夕の悲歌

われひたひの額ひたひに黒き蜘蛛の巢、降りかゝり
園の薔薇の花悉く地に落ちたり

垣に沿ふて白き横顔、闇に消ぬ

落葉おちばせる梢に鋭き鳥の叫び、のこるのみ

ああ悲しき「人生」の夕は来りぬ
われ敷石に跪き心破れて唯祈る

君よ静かに吾れに來れ
夕の鐘君しりへが後に鳴り響かん

また微風そよかぜは君が髪と枯草とを弄り行かん
かくて君、わが額より不淨を拂へ

やがて月はポプラの梢に高く昇りて

わが額の上に接吻は白く
影みだす池の水の面に鯉の背は光らん

落葉樹

空の月を求めて、あかく
瘦せた、あまたの手を見せる樹々……

風を避け、妻と軒端に
溜水の月をかこむ……

睡眠

夜は甘し、木の實よりも、夜はやさし乳母めのとよりも
星は空に疲れて息へる蛾にも似たり

(水のおもてに、ほの白き羽は浮べり)

夜はなべてのものの上にぞ平和を興ふ

かの庭園の蟻も臥床につきたらん

運び得ざりし蟲を水際みぎはにのこしたるまま

かの築山の根がたに夢を結びてあらん

夢は美しオーロラよりも、眠りは一日の樂園なり

愛しの人よ、いつまでか君は嘆くぞ

夜は静けし、悲しみも驚ろきも無きに非ずや

顔をあげよ、木々のかなたに窓は明るし

いざ吾れ等白百合の影さす臥床に行きて息はん

別離

あてもなく打つや霜夜の空帖（芭蕉）

年おはる夜や更けぬらし。野に音もなし

（いでてきし部屋の壁より外套のバサミ落ちしか）

年おはる夜や更けぬらし、野邊仄白し

（かたびらをきて立つ死者か空に浮く木の行列よ）

さぐる手の提灯ヲシケンは消ゆ、永久とこせよに女は去りし

（さぐる手の指はふるふよ提灯を濡らす冷雨や）

年おはる夜や更けぬらし、永久にひとり残りし

（灯ひの消わし提灯さげて二十四の暗にぞ入らん）

年おはる夜や更けぬらし、永久に女は去りし

（野のはてに灯ともしび一つ——一枚の齒を露はしてさげすめる老

の笑ひぞ！）

怠惰のごき

夏もおはりの、とある土曜の午過ぎである

北の窓近くに臥ねて思ひに耽つてゐるのである

(それは決して青空の、まして水の思ひではない！)

たゞ東の間の花束の重みのことか、さてはまた

明日は冷たい妹の掌にある肌ざはり……………

このとき部屋を過ぎてゆく微風そよかせがある

(私はそれに氣付かない！)それは恰も

心のなかを過ぎてゆく古い記憶か？

遠い海からくるのである、昔の鳥の羽搏きの

限らないものへの、切ない憧憬あこがれれの……………

(海は神の胸である！)わたしは知らずに此處に寝る

微風そよかせは私を撫で、行くばかり、おろかな岩を

時は過ぎ行く……………深い思ひもさめるとき

なほ微風は吹いてゐる(やゝまじる涙の冷氣！)

そして青葉（すなほで賢い）青葉、青葉に囁いてゐる……

静物に讃す

— 藤井外喜雄に —

とことばに眠らん壁にかこまれて

水わづか青くたゝへし水瓶よ、汝思想の記念碑よ

なれこそはなれを描きし人よりも

なれの置かれし部屋よりもなほ古りしなれ

ながややに疲れこごちの水の色、そは深淵なり
 幾千年終焉の息の唇をひたせり

ややににごりし水の色、その底ひには
 なやみを落葉ごごもに沈める

さて薄よごれし土碗よ

わが唇をふれしめよ

われは嗅がん塵の下より

カイアンが酒の香とイソルデが戀の媚薬と

さらに苦しきジュリエット、眠薬ぞ

また辛きソクラテスが毒の香を

かくてわれ強き強き死の誘ひをうくるべし
 遂に狂はん、水瓶の蓋いや堅にされれば

秋 日

千町田ちまちだに面する門ぞすぢばりし扉、塞せり

傾ける「赤十字正社員」表札古りぬ

物言ふも物憂きごとし、つかれし門の「老顔」よ

寛の下、鳴子繩あり、従ひて花畑に出よ

菊あまた午後ごごの光に佛らが眠れる如し

黒く小さき病蠅は迷ふ貧兒が瞳にぞ似る

更らにいいでよ「乞食禁入」立札ありて河端なり

一面に稻伏すなかに野鼠の影ちろろたり

すすめらの聲さへきかず、野鼠の影ちろろたり

かの老ひし門にかへれよ、めんごりの鳴聲高し

留守なるか——椽に留守居の娘あり

足投げて、熟れし股をぞ陽になめさす

さて裏に出よかくて見入れよ、水甕に落葉昨日に變れるを
また知れよ灰小屋の隅今し落さる卯早くも冷え行くを！

雪の 後

陽も雪の切れ間まを見つけて
落ちてしまつた……………

わたしばかりはぬかるみに
足駄を失ふ……………

夜の雨

庭に降る雨のひびきは

戸に近く身をよせかけて

ほこらかに口説きはぢめる……

かどすると忽ちに遠くに嘆く……

枯枝をなげうち、なげき

さてしばらくは聲をのむ……

すると不意に雨戸がゆれる

蠟燭の灯が横になる

私わたしはつひに妻を呼ぶ——

隣室に答へはあらず……

またしても雨戸がゆする

またしても壁の上を影が走る……

思ひ出の小徑

陽が傾いたゆえもなく、胸は傷む
 心をみだす響も街から來ないのに
 私の逍遙ふ小徑は眞直ぐ

公園の緑にきえるに

快い風、静かな流れ

だがあまりにも變らぬ光と水の眺めよ

ああその昔逃がした鯉が泳いでゐる
 その昔忘れた手桶が浮んでゐる

私の影は一步ごとに夜へとごくに

私の心はあやしげなあまりに明るい朝あしたにかへる

あゝこの快い春と夏このあはひのとき

その夕暮れ、私の肌は軽やかな昔のしやつに身を顛ふ……

過
勞

影と影、心と心、すべてみな握り合ふ手は離れ足はほぐるる
眠るにはあまりに狭い格子窓、黒がれる蜂の巣となる

(ああ悲しい)さらでだに吐く煙、何の巢ぞ、網を張る

網を張る、網を張る……………

幼な子よ眠れるか、汝が父買ひえない揺床の夢になやむ
書きわれない限りない生涯の網張る紙の面に患ふ

戯るか? くすれ行く網くぐる蠶かすかす

食もとめつぶらなる頭うちふる

あゝ何を與ふるものぞ桑葉みな肉くされ網のみのこる
いかなる手大いなる網ゆする、われもゆるる

夏の夕

私は村の小徑こみちを出よう

そこはすつかり影つてきたから

後ろに續いた生垣の、その繁り葉の

陰にだまつて餌を拾ふ鶏は遺して

野邊はひらける！（黄金きんと緑の）

耳に近くさざめくこゑ、木梢こねの、草の

——それは夢にきいた海の遠鳴りである

——それは未明の灯影ほかげに、夕の、渚に私の心を洗ふ

ああほのかに、ほのかに來るよ、その香かをり

桑の畦畔うねから、無花果から（その實みは青い！）

ギリアドの山の香も及ばない

だがその香、そのさざめきはすつと昔に覺えがある！

ああ微風そよかぜよ！ 私の前を後ろを渡る

お前は私の夢を醒ます（それはいまは
見ない私の姉である）おお微風よ
姉よ急がう、夜よが落ちる前、吾等はかなた
山の向ふの夕陽ゆうひの國へと歩み入らう！

夜の街（スケッチ）

……街角の奇しく明るき飾り窓に
大いなる鐵の扉はいまし降りぬ

敷石路行く人暗く、足早やに去る
幾時ならん——時計は破れて下りたり

屋臺店の白きテントは傾きしまゝに捨てあり
栗を焼く老女かへりみ、カンテラのねぢをまさあぐ

かなた仄暗き建物跡に菊は匂へり

水道の水噴く傍はたに潺細き聲あり、乞食なり

「さなりナポレオン　モスクヴ退却」

うなづきつゝ、マントの學生横町に消ゆ

十字街に花悉く唇くちを土につけたらん

十字街に灯のみ高し

無題

空は嵐を封めた城の壁をさながら

地平線は遠く明るく、私の愛は

北極の氷のなかに立てた墓石

その上に、また花もない木々の上に

陽はすつかり疲れ果てた心のやうにたれかゝる

けれど陰ふむ鳥の唄さへきこえない

焼かれた草と、思想おぼろを踏んでくる妹の

足音ばかりが物うく響く……………

私の部屋の北の窓は堅く閉され

沈静しじまと悲哀は私の胸に重くよごみ

わみと薔薇ばらとは花瓶の中に凍つてゐる

私は今はやさしい妹と焼える壺かまを待つばかり……………

新 生

梅雨^{つゆ}の夜さ、ふとしのびこむ月の影（そは満月か？）

夢おごろかす部屋にあまたナイアドの眞白の反射！

——ああ幾年の眠りのなかにわれはあつたか——

——いにしえ聖のしはぶきの快よさに——

——われの眠りは巢だつ羽音^{はせき}をさいたのに——

——ああ幾夜古哲人が髭の香をよろこんだのか？——

これはこれ散ばふ書物に鳥の足跡あざやかな……………

われは朝^{あした}、森深く鶴の立ち舞ふ眼^{まなこ}のあたり見る

——ああいま裸體、その脊に妻、その胸に子を——

——われしろがねと水の世界を空高々と飛昇する！——

老ひた空

—西條八十に—

煙る若芽の樹のうち續き、蔓^{いづか}の切れ目に

空は黒ずむ帆のやうだ、日が落ちた後の心に

暗い冬の鹽風に、手觸り粗くなつた空——

垂れた廣帆よ——その下をいかに陰氣に蝙蝠が舞ふ——

(それは私の涙まじりの夢を孕^{はら}んだ心である)

それは空の帆が落ちるまで胸の中ではためいてゐる)

あゝ空は何を教へる？ (人の世の春は半ばに)

空は老いた帆のやうだ (——人を海へと急がせる)

冬の午後

私は纒かな日當のなかにうづくまる

向ひの屋並の長く伸びた影に隣し……………

(たちまち身うちを寒さが走る)

いましてがた読みふせてきた書物のわきに

數多の知らない文字が浮ぶ……………

梅雨期

草の廣野に道一すじも残つてゐない

私の前には太る河、たつた一つの黄ろい梅の實も流れない

私の胸には夢もない、夜毎雨うつ佛間さながら……………

けれど或夜月が出てゐる（人は誰も氣付かない！）

——それは私の古い悲しい思ひ出に似る

（だが唯一つの光を消すな！）——その合龍燈の明りのさ

まの——

束の間の幸寄せてくる黒装束の空の僧兵（影の黒さよ！）

忽ち消される月の影（胸の燈明！）

酔

(イントロキシケイション)

痺れる菌きんの甘さを残す接吻よ!

狂ほしい迄、僕が求める、ああその唇!

それは湿つて暗い落葉落ちばの下に花咲く蔓珠しなまがり沙華!

(嘆く月の血を吸ひ乍ら微笑む花だ!)

また僕の沼にも優る深い疲勞つかれを

覆ふてくれる暗い顔よ!曇つた午后の風景よ!

お前の髪は泥と垢とのべつとりと附く

沼岸の柳のやうだ、またそれは乾草と蛇の愛撫だ!

おおそして、お前の呷く聲々は

雨の上つた薄暮の海に

長く、重く、呻く法螺ほらども異らず

我が泥酔の魂を、星影疎らな海のなかへと沈ませる……

夜の躑躅

追ひても追ひても猶さまよへる列なす白き羊の群よ

日曜の夢に現はる羊の群よ

なやましく、もの憂く半開きし瞳に移らふ白き羊の群よ

臥床なく食なくさまよふ羊の群よ

夕暮れの動かぬ暗にうねうねと續く白き羊の群よ

音楽に、長き髪に、はた物語りに、疲れ心に

移らふ白き羊の群よ

病みし春の横顔よ、意識なく横ふ裸體よ

ものうくて、ものうくて力なく眼とざせば

なほ列をなし、ことごとく首をうなだれ

うごめきて行く園の白き羊の群よ

最終の夢

神の息に觸れるともなく

ふつと折れた線香の灰のやうに

腰を折つたまま息たえる

無言の老婆を夢にみた

姉よわたしを醒してくれるな

その夢に再び私は落ちて行く……

命の壺をこわした傍はたで

泣きつゝ寝入る子供のやうに

私のはたへ寄らないでくれ

妻よその身持ちの重い足音で

それは自ら投げだした

詩集がたてる音より寒い

あゝ私には一條の

雨かごまがふ光もいたい
私に來れ烈しいし。びれ。

しほれたままに息たえる……………

故園の萊—畢—

青騎士叢書

—各册五拾錢 送料四錢—

佐藤一英著

故園の菜

〔九月刊行〕
〔既刊〕

井口蕉花著

墜ちたる天人

〔近刊〕

高木斐瑳雄著

黎明の林檎

〔十月刊行〕
〔全〕

春山行夫著

海は美しい

〔十月刊行〕
〔全〕

齋藤光二郎著

火と雪

〔全〕

題名一野々部逸二、岡山東、澁谷榮一
未定一 大山 廣光、夏川 靜

大正十二年九月三十日印刷
大正十二年十月十二日發行

（故園の菜）青騎士叢書（1）
定價五拾錢 郵稅四錢

愛知縣中島郡秋原町高松

著作兼 發行者 佐藤一英

名古屋市東區鶴屋町二丁目十六番地

印刷者 山田慶太郎

名古屋市東區鐵屋町二丁目十六番地

印刷所 山田活版印刷所

電話東二八五番

名古屋市東區主税町四ノ十六

發行所 青騎士編輯所

發賣

詩歌雜誌「青騎士」取次書店 又は 振替名古屋
八五〇二番 山田活版印刷所内「青騎士」出版部宛